〈書　評〉

松山 壽一著

『シェリングとカント――『オプス・ポストゥムム』研究序説』

（法政大学出版局、2021年）

内田　浩明

本書の著者である松山壽一氏は、『ニュートンとカント』(晃洋書房、1997年(改訂版：2006年))、『若きカントの力学観』(北樹出版、2004年)に加え、岩波版『カント全集』の前批判期論集の訳者・解説者としても知られるが、一方で、シェリング哲学に関する多く著作や翻訳を長年に亘り精力的に手掛けてきた高名なシェリング研究者でもある。

ところで、本書のサブタイトルが「『オプス・ポストゥムム』研究序説」であるにもかかわらず、メインタイトルが「カントとシェリング」ではなく、シェリングに重点を置いたかのうように「シェリングとカント」となっていることに若干の違和感を覚えた人もいるだろう。しかし、著者は敢えてそのように銘打ったと明言している。

その所以は本書「まえがき」で詳らかにされている。それを要言すれば、若きシェリングの一連の著作の公刊時期と『オプス・ポストゥムム』(以下、OP と記す)の執筆時期がほぼ重なっているだけでなく、共通のテーマも数多く見られること、しかもカントへの追悼文(後述)に見られるようにシェリングは OP の存在自体を知りつつも、その内容までは知りえなかったがゆえに OP に影響を与えた可能性があるとすればシェリングの方であると解せること、そのためにも両者のテクストに則した実証的究明をする必要があることが理由とされる。また、著者が「ラビュリントス」に準えるほど、難解な OP の読解に際して、著者が精通しているシェリング哲学を「アリアドネーの糸」としながら、如上の問題にアプローチする戦略を採ったことも、理由の一つである。

上のようにシェリングを導きの糸としつつ OP を解明するという意図のもとに書かれた本書全体は、二部構成の全六章となっている。第一部ではカントとシェリングの「自然哲学」の比較考量に重点が置かれているが、第二部への予備的考察としての役割も部分的に担っている。一方、第二部では OP の考察が集中的に行われることになるが、特筆すべきは、本書が OP の最初期から最晩年までの草稿を幅広く扱い、主要トピックに論究している点である。管見の限り、我が国に類書はなく、本邦初の試みであると言ってよい。紙幅の都合上、本稿では第二部に重点を置くが、第一部の内容にも少し触れておきたい。

第一部は、カントの没後の翌月に発表されたシェリングによる追悼文からの引用で始まる。その追悼文の大要としては、カントが形式面を論じた理論理性批判の後に、実在面を論じた『自然学〔Naturwissenschaft〕の形而上学的諸原理』を分離的に論じたために、カントの自然学が普遍を特殊に調和させる統一的な自然哲学になりえなかったことを批判しつつも、晩年のカントが『形而上学の自然学〔Physik〕への移行』の執筆に取り組んでおり、もしそれが完成していたなら多大な関心が寄せられたであろうことなどが述べられている。

ちなみに「ホィッグ史観」に慎重な著者は、第二部第五章の「Physik の語義」という箇所で Physik を「物理学」と訳出するのは「時代錯誤」であり、Naturwissenschaft も我々にとって馴染みある「科学」という用法が歴史的には19世紀以降のものであるがゆえに「自然学」と訳すべきことを力

説しているが、先の追悼文の内容で評者が重要視したいのは、次の二点である。カントが統一的な自然哲学を構築できなかったのはカントが形式と実在を別々に論じたことに起因するとシェリングが解していること、および当時未完で未発表であったOPの内容をシェリングが知らないのは当然であるとしても、OPの存在自体をシェリングが知っていたという事実である。後者の事実が著者のOPとシェリング哲学との比較考量という問題意識をより一層刺激したと推察されるが、前者のカント自然哲学へのシェリングの批判の内容とは、より具体的には何を指すのだろうか。

著者は第一部第三章を「シェリングの自然哲学」と題し、この問題を究明している。この章にも「世界霊」や「エーテル」等のOPでもしばしば言及される示唆に富む考察が多く含まれるが、ここでは第一節の「シェリング自然哲学とカント動力学批判」に焦点を絞ろう。カントの「動力学」は『自然学の形而上学的諸原理』の第二章で論じられているが、シェリングが批判するのはカントの引力の導出方法に存するとされる。すなわち、カントは「視覚」によって「確実性」を有する「斥力」と、「推論」による「仮定性」の域を出ない「引力」という二つの力の「相互作用の均衡」から物質の導出を試みたが、斥力だけでは物質成立の可能性を説明できないために、「第二の根源力」として引力を導入し、しかも「不可入性」という物質の根本性質を前提として用いたがゆえに、カントの説明は単なる論理的・分析的な説明にすぎないとされる。このように、カントを批判するシェリングは、引力と斥力を「共通的原理」から合一的に説明できないかどうかも含め、「自然哲学」関連の著作を1797年以降、矢継ぎ早に公刊することになる。各著作の内容の詳細と見解の変化とについては読者に本書を紐解いてもらう他ないが、ただ一点指摘しておきたいのは、シェリング哲学に通底するのは、かの有名な「自然は可視的な精神であり、精神は見えざる自然である」と解する姿勢であり、当時飛躍的な進歩を遂げた自然学の知見を駆使しつつ(例えば「磁気、電気、化学過程という無機的自然の力動階梯が感受性、刺激反応性、形成衝動という有機的自然の力動階梯」に対応させるといった具合に)、カントとは違ったスタンスから哲学体系を構築しようとした点である。

さて、いよいよOPが主題となる第二部に議論を移すが、やはり網羅的に論評することは到底できない。そこで、OPにとりわけ特徴的な以下の二つのテーマに論点を絞りたい。いわゆる「エーテル演繹」、および「超越論的観念論」と「スピノザ主義」との関係である。

そもそもOP当初のカントの執筆動機は、多くの先行研究で指摘されているように、形而上学的観点からアプリオリに扱われた普遍的で形式的な自然と、多様な物質の差異に留意した具体的で質料的な経験的自然(すなわち経験的な学問しかありえない自然学によって規定される自然)との間に存するギャップを埋めるために両者を架橋する重要性をカントが自覚したことにある。こうした両者のギャップを埋める媒質・媒介概念としてカントが導入するのが熱素・エーテルであり、そして「移行１-14」まではカントも古代以来の考えに依拠しつつ「仮説的」な「理念」としていた熱素・エーテルの現存の証明がいわゆる「エーテル演繹」である。いみじくも著者は初期OPに分類される「基礎体系１－７」における「カテゴリー表」に従った「原物質」・「原素」としての「熱物質」・「熱素」の位置づけに言及したうえで、それらが「格別な扱いを受ける」のは1799年５－８月に書かれたと考証される「移行１-14」であることを指摘している。

その「エーテル演繹」について、本書では「エーテル演繹(その１)」と「エーテル演繹(その２)」、および「エーテル演繹の問題性」の三節に分けて論究されることになるが、その１では「移行

1－2」を中心に「熱素」と「エーテル」の歴史的位置づけや特性(「微細物質」であるがゆえの「拡張性」・「浸透性」のほか「不可秤的・非囲驍的〔ママ〕・非凝集的・非消尽的」という特性)、および『原理』の「総注」との関連性が丁寧に述べられたのち、「エーテル演繹」が「直接的証明」と「背理法」に基づく「間接的証明」の二種類があることなどが指摘されている。一方、その2では「移行3」以降の内容が検討されているが、その1との決定的な違いとして、ヴォルフの「汎通的規定」のテーゼをカントが「汎通的に規定されているものは実在する」という形で逆転させ、エーテルの存在を証明しようとしていることが挙げられる。だが、こうした発想は、『批判』(「純粋理性の理想」章)からの逸脱の可能性を孕んでいる。これに関連し本書では、カントの「エーテル演繹の問題性」を「構成的原理と統制的原理との合致」という観点から指摘している。すなわち、両原理の厳格な峻別がカント批判哲学を支える基盤の一つであるにもかかわらず、著者によれば、OPにおいてすでにエーテル演繹以前の草稿(「基礎体系1－7」と「A/B移行」)にもこうした発想が見受けられることから、両原理の合致を説くエーテル演繹も批判哲学のルビコンを渡るものとされる。実際、エーテル演繹は「移行1－14」以外の草稿には見られず、カントは短期間で断念している。

さて、第二部から採り上げるもう一つの焦点である「超越論的観念論」と「スピノザ主義」との関係については、OP第1束において突如カントが「スピノザの超越論的観念論」やそれに類する文言を述べていることから、カントがスピノザ(主義)を許容したのかどうかを巡る問題であり、これまでもさまざまな解釈がなされてきた。この難問に対して著者は、スピノザ(主義)のOPにおける「超越論的観念論」の「変容」を説いている。すなわち、正当な「スピノザ」理解としては完全に的外れであるにもかかわらず、リヒテンベルクの影響のもと、カントがそれを受容しつつ、解釈(改釈)したとされる。

ここで採り上げることができなかった論点・主張も多い。そこで最後に二点だけ強調し本書評を閉じたい。まず第一に、「批判期カントによって『化学』と見なされていたものがあくまで『旧化学』(フロギストン化学)」であり、後にカントがOPや「覚書」でラヴォワジェの新化学への若干の言及を行っているとしても、それがゲーラ―の『自然学辞典』等の二次テクストに依るものであることなどが先行研究を踏まえながら興味深く詳述されている。次に、強調したいのは、OP研究においては『自然学の形而上学的諸原理』(とりわけ「動力学」章の総注)、もしくは『判断力批判』との関係を究明するいずれかの手法が従来一般的であったが、筆者のOP解釈の手法はそのどちらにも与しない点である。これは穿った見方をすれば芯が通っていないように映るかもしれない。しかし、そもそもOP自体が迷宮のように錯綜し、しかも執筆時期によってその内容も大きく変化している。それゆえ、OPの初期草稿から最晩年の思想までを時系列で丹念に究明する本書の特長に鑑みれば、三批判書や『原理』、『プロレゴーメナ』等を適宜、適所で用いる手法こそが本書の魅力を一層引き立たせているとも言えよう。